

2017年法科大学院全国統一適性試験

第2回 講評

2017年6月18日

LEC 専任講師 永野康次

1. 試験全体について

(1) 総説

今回の試験は、第1回の事務処理重視型とはやや異なり、第1部では非常に基礎的な問題がほとんどを占めたほか、第2部でも作業量がそれほど多くない問題が目立ちました。基本的な日本語力等を端的に問うという出題といえます。

具体的な出題傾向ですが、第1部につき、第1回でみられたようなパズル系の問題は姿を消し、実施初年度によく出題されていた非常に基礎的な論理型の問題（補強又は反論型）が多くみられたほか、形式論理、資料解釈の知識があれば容易に解けるタイプの問題も、合計で5問程度出題されるなど、非常に典型的な問題構成となっています。

なお、難易度としては、第1部については第1回よりも解きやすい問題が多かったことから易化といえますが、第2部は単純作業ではなく考えることで解くタイプの問題が目立ったことから、解き慣れているか否かによる個人差が大きかったと思われます。また、第3部は、第1回と同様、問題文の参照箇所を自力で見つけなければならない問題が多かった分、事務処理の力が端的に問われているものといえます。また、第1回を含め、例年通りの内容として、すべての部を通じて、難易度の高い問題とそうでない問題の落差は大きかったといえます。また、特に第1部において、過去問とほぼ同じ出題が目立ちましたので、講義などで十分な過去問演習を行っていた受験生は、容易に解答できたでしょう。

(2) 出題内容

第1回と同様、1部～3部のすべてにおいて、基礎的な問題を短時間で解くことが強く要求されました。ただし、第1回と異なり、第1部において基礎的な問題が多くみられたことから、特に時間管理を意識しなくとも、高得点が取りやすかったのではないかと思います。これに対して、第2部は、考える問題が多くみられたため、単純作業のみしか対策しなかった受験生にとってはつらいものとなったでしょう。

各部ごとに概観していくと、第1部は、試験開始直後にみる問題である問題1、2が非常にシンプルで解きやすい問題でしたし、その後に続く問題の形式も、長い問題文はなく、かつこれまでの過去問から逸脱するところもないため、5年分程度の過去問対策を行った程度で、十分な高得点が得られたものと思われます。

あえて、解答にやや時間のかかる問題としては、問題18程度でしょう。過去問演習がいかに重要かを教えてくれる回だったといえます。

第2部については、第1回でみられたような単純作業型の問題よりも、考えながら解く問題が目立ちました。このタイプの問題は、慣れているか否かによって結果が大きく変わりますので、どれだけ適性試験の事前準備を行ったかがポイントとなりました。特に、問題4は早く解けた受験生とそうでない者に大きな差があることが予想されます。

第3部については、第1回と同様、各小問で設問文のどこを参照すべきか明示しない小問が多かったため、時間不足に陥った受験生が多くいたことでしょう。

(3) 難易度・傾向等について

第1部：非常にシンプルで解きやすい問題が多かったのが今回の特徴です。過去問の焼き直しのような問題は多数を占め、かつ難易度も抑えられていた問題が目立ちますので、高得点を狙いやすかったものといえます。また、いわゆる多くの作業を要するパズル系の問題は出題されず、補強・反論等の論理系問題がほとんどでした。さらに、形式論理（問題2，23）や資料解釈の要素を持つ問題（問題1，16，17）等も、基礎的なものにとどまりました。

これらは、過去問の演習で十分な高得点が狙えるため、第1回よりも易化したものといえます。

第2部：第1回を中心であった単純作業型の問題よりも、問題文の指示に従って頭を使うタイプの問題が目立ちました（問題1，2，4）。ただし、難易度としては過去問の枠を超えるものではなく、特別な着眼点や解法は要求されていません。その意味で、第1回から難易度が変更されたというわけではなく、傾向が異なるということがいえます。過去問の演習を行っていたか否かによって受験生同士の差がつきやすい問題でした。特徴的な問題としては、終盤に差し掛かり時間が不足しがちな状況で頭を使わなければならない問題4でしょう。

なお、問題3については、第1回でよくみられたものと同様、行うべきことは明確ですので、純粋な事務処理が問われたものといえます

今回の問題は、過去問などで着眼点や解法をインプットしていればそう難しくなく、短時間で解ける問題ですので、過去問を解きなれていない方にとっては非常につらい出題になったのではないのでしょうか。

また、こうした問題では、ちょっとしたつまずきで多くの時間を浪費する危険がありますので、時間管理の重要性も前回より増したといえます。

第3部：前回、および従来の日弁連型とほぼ同じ出題となりました。前回と同様、各小問で参照箇所が明示されないものが目立ったため、時間がかかったと思われる。なお、問題4では並び替え問題も出題されましたし、問題文もやや読みにくいものとなりましたので、時間不足で最後まで解答できなかった受験生が多く発生したと思われる。

(4) 小括

第1部～第3部までを通して、多少の傾向の変化はあったものの、すべて過去問の枠内での変化であり、新しいタイプの出題は見られませんでした。例年通り、過去問の演習を十分に行い、そこで問われた能力および必要な解法をしっかりと身に付けていれば、十分に高得点を得られます。

2. 各部の内容について

(1) 第1部：論理的判断力を測る問題（40分）

① 出題形式

大問数：24問 小問数：24

② 全体の傾向

例年通り、また第1回と同様、大問24問、小問24問となっています。

傾向については、前述の通りシンプルな出題がほとんどであり、具体的には、論理に対する反論や補強を行わせる問題（問題5，6，9，12，15など）、資料解釈を知っていれば解きやすい問題（問題1，16，17）、形式論理の影響が強い問題（問題2，23）などが出題されました。

前回と異なる点は、いわゆるパズル系の問題が出題されず（第1回問題12，16，21）、また、大規模なルール型の問題も出題されませんでした。例年の傾向ですが、第1回と第2回とで傾向を意図的に変えていることが明らかです。そのため、今後も、全過去問の傾向を踏まえ、第1回の出題内容をみれば、第2回の出題予想が容易にわかることとなります。

③ 特徴的な問題

問題2：典型的な形式論理の問題です。最初のほうの出題ですので、絶対に間違えてはいけないものとなります。

問題8：一時期よく出ていたタイプの問題で、問題文からわかることとそうでないことを峻別させるものです。近年は出題されていみせんでしたが、過去問では何度も出されていますので、確実に正解する必要があります。

問題16：数式が与えられてはいますが、問われている内容は非常にシンプルなものです。どのような問題でも、まずは解いてみて、時間がかかりそうであれば後回しにするとよいでしょう。

問題18：具体的な数字をもとに論理展開をしている文章に対し、批判を行わせる問題です。適性試験における資料解釈問題として、典型的なものとなります。

問題20：従来からよく出題されている論理関係の問題です。原則・例外などの関係を端的に見るだけで正解を得ることができますので、落ち着いて解くことが必要です。

問題22：解答にやや時間を要する問題です。難易度はそう高くありませんが、この時点では、多くの受験生が時間不足に陥っていることが予想されますので、飛ばし問題にした方も多いのではないのでしょうか。

(2)第2部 分析的判断力を測る問題 (40分)

①出題形式

大問数：4 小問数：24

②全体の傾向

大問数が4問であり、各大問に小問6つずつ付されますので、例年通り全問で24となります。

傾向ですが、第1回でみられたような、いわゆる作業型のものは問題3のみとなりました。多くは、考えることによって時間の短縮が可能であったり、問題の流れを無視して作業を行うと長い時間を要することとなったりするタイプの問題となっています。過去問や直前の講座などで第2部の問題を解く上での発想を身に着けていた受験生であれば、比較的容易に対応できたものと思われます。

やみくもに作業を行うのではなく、問題文の指示に基づいて、解答を出すのに必要な作業を適宜行うという、適性試験第2部の基本が端的に問われた年度です。

③特徴的な問題

問題4について、時間が足りない中、問題文を冷静により複数のパターンを考えることが要求されるため、難易度が高かったものと思われます。

(3)第3部 長文読解力を測る問題 (40分)

①出題形式

大問数：4問 小問数：24問

②全体の傾向

大問数、小問数ともに例年と同様です。また、第1回と同様、問題文の問題文の参照箇所が明示されていない小問が多くみられたため、時間不足に陥った受験生が多かったことと思われます。内容面における難易度ですが、前回と比べやや解きにくい問題が見られましたので、やや正答率が下がるものと思われます。

問題文の内容は、問題1が年功序列など日本文化、問題2が組織論、問題3がコミュニケーション、問題4が俳句等の文化に関するものとなりました。これらのセレクトは第1回と同様、幅広い分野にわたるもので、かつ読みやすい文章とそうでない文章が混在しているという点も、第1回および例年と同様です。また、問題文の量も第1回および例年と変わりありません。

これまでの過去問でもそうだったように、問題文をじっくり読むのではなく、まず各小問を見て検討すべきことをおおよそ理解し、そのうえで問題文を読むと効率よく解くことができたといえます。

③特徴的な問題

問題4については、多くの受験生になじみの薄い内容ですし、かつ出題場所も最後ですので、時間不足に陥った受験生が非常に多かったことが予想できます。

適性試験に限らず、小論文試験や法律科目試験でも、かならず時間管理をしっかりと行うようにしてください。

(4)第4部 表現力を測る問題 (40分)

①出題形式

大問数：1問のみ

②傾向

ともすれば、単なる主観と主観の衝突にすぎないと思われる議論について、客観的な基準となるべきものを設定することが要求される問題です。問題では、「少なくとも3つの論拠」すなわち、理由づけを用いることが要求されていますが、試験時間や、前述の客観的基準の設定という見地からすると、3つ挙げるだけでも困難と思われます。結論自体は重要ではありませんので、それぞれの論点ごとに規範・あてはめを整理して書くだけで、十分な合格答案となるでしょう。

3. 総括

いわゆる義務的な適性試験の受験は、今回が最終となります。ただ、特に傾向や形式に変化があったわけではなく、いずれも例年通りとなりました。過去問対策を十分に行っていた受験生にとっては、それほど苦勞しない問題だったといえます。これは、他の試験でも同様で、司法試験にせよ予備試験にせよ、過去問をしっかりと解き、そこで出題される能力を真摯に身につけることが必要です。

今後ですが、仮に今回の試験で思うような結果が出なかった方でも、ステートメントに力を入れることで1次試験を突破することは十分に可能です。また、1次試験を突破できれば、法律科目や小論文試験対策をしっかりと行うことで、十分に合格が可能です。

あきらめず、最後までがんばりましょう。